2007年10月1日発行（毎月2回1日・15日発行）第11巻18号（通巻207号）
1997年3月10日第3種郵便物認可

pen
with New Attitude

10/1
2007 No.207
500 yen

スイス
デザインをめぐる旅。

グラフィック・建築・アートの知られざる王国へ！

とじ込み特集
男のエルメス最新案内。

プロダクト | ヨルグ・ボーナー Jörg Boner

着せ替えの発想で、独自のスタンスを確立。

1968年チューリヒ近郊のウスター生まれ。バーゼルデザイン学校を卒業後、99年に独立。チューリヒを拠点に、インテリア・プロダクトの分野でデザイン活動を展開する。2006年にはIFデザイン賞で金賞を獲得するなど、国際的にも注目を集める。

オフィスで自作の「ヴォッグ42」に腰掛けるヨルグ・ボーナー。「この椅子のクッション材のように、平面が立ち上がって立体になって完成するというのが、目下の僕のテーマ。板を紐で繋いで作るランプもデザイン中だよ」

チューリヒに拠点をおくプロダクト・デザイナー、ヨルグ・ボーナー。彼の作品を年代順に追うと、モノ作りに対するアプローチの変遷が明白に浮かぶ。

初期の作品「アヤックス」は、内部に照明を仕込んだテーブル。アイデアから制作まで自分で手がけることを重視した、職人的な香りの漂う家具だ。

さらにアート志向へと進んだのが「オルマ」。コの字形の断面をもつFRP素材の棚は、彫刻作品のような気持ちで作ったというだけあり、滑らかな質感がとても美しい。とはいえ、量産が難しいデザインゆえ、市場に出回ることはなかった。

「この頃は、アイデアを自分で実現することが何より大切だったから、量産できなくても構わないと思ってた。でも、さまざまなプロジェクトを通して、信頼できるクライアントや熟練した技術者たちと話すうちに、チームの密なディスカッションから生まれるものこそ大事だと気づいたんだ」

靴のインソールを重ねて、椅子のクッション材に。

こう語るボーナーのブレイクのきっかけとなったのが、2005年に発表したシェルフ「ドレスコード」。木枠の骨組みと、クッション材でくるまれた板が組み合わされている。この素材がユニークだ。「量産できるクッション材を探していたときに、血圧測定器のメーカーと出会ったんだ。その会社は靴のインソールも作っていてね。これは使える！　って思った。インソール用の合成繊維地を重ねて端をプレスすれば、クッション材が簡単に、しかも安価で量産できるとわかったから」

スポーティな印象と鮮やかな色合いも、若年層にアピールするはず。さらに、引っ越し時には折りたたみ可能な作りにすれば便利だ。マスプロダクトの条件をしっかり意識して完成させた「ドレスコード」は、果たして大好評。発想と素材の新しさが注目され、国内外のデザイン賞を多数受賞した。

このクッション材の発想をさらに発展させたのが、最新作「ヴォッグ42」。シンプルな木製フレームのアームチェアの座と背の部分に、キルティング加工した1枚のクッション材を巻いた。平面のクッションがしなやかに立体となるデザインは、実に洗練されている。簡潔で端正なフォルムに、斬新な提案をさり気なく効かせるのが、ボーナーのデザインの大きな魅力として完成されつつあるようだ。

「うれしいね。この椅子の木製フレームは、昔ながらの作りを継承してる。そうした伝統を、モダンなアイデアと最新技術で包み込むというアプローチは、スイス・デザインの現在とシンクロしていると思うよ」

2006年にデザインしたランプ「クックック」。メタル板の枠と、薄いポリエステル生地のシェードを組み合わせている。

フロアスタンド「アルマ」も06年の作品。シェード部分は、手刺繍を施したファッショナブルな生地を、枠にふんわり被せた。

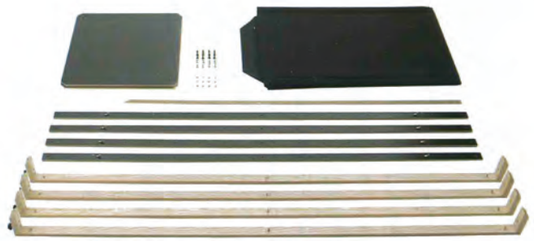
ボーナーが個人的に思い入れが深いと語る「オルマ」。そのままサイドボードとして使っても、重ねてシェルフにしてもいい。

ヴォッグ42
Wogg42

そのままでもシンプルで美しいフォルムのアームチェアが、キルティング状のクッション材を被せることでぐっと表情豊かになった。平面状の生地が、3次元的に展開されるという発想が心憎い。

アヤックス
Ajax

2000年に発表された、ボーナーの初期の作品。2重になっている天板の内部に照明が仕込まれていて、テーブル自体が光を放つ仕組み。ボーナーらしい簡潔な造形で、MoMAに展示されたことも。



ドレスコード
Dresscode

写真は一見パーティションのようだが、実は扉つきのシェルフ。扉を開けると、内部には複数の仕切り棚がついている。トネリコ材の枠と、クッション材でくるんだ板の質感の対比が、新鮮で個性的。ボーナーの代表作のひとつ。